

平成18年4月の解説(府県天気予報)

【4月の天候状況】

月を通して低気圧が日本付近を通過することが多く、全国的に雨や曇りの日が多くなりました。特に中旬の前半には、動きの遅い低気圧の影響により全国的に曇りや雨の日が続きました。

月を通しての日照時間は、全国的に平年より少なく北日本では平年の60%を下回った観測地点もありました。降水量は平年に比べて東日本で少なく、北日本と西日本では多くなり、北海道、九州、四国地方では平年の170%を上回った観測地点がありました。気温は全国的に平年より低く、特に北日本では平年より2以上低くなった観測地点もありました。

【4月の検証結果】

17時発表の天気予報で「降水の有無」の全国平均の適中率は、明日予報では83%で例年^(注)より1ポイント低く、明後日予報では79%で例年より2ポイント低くなりました。地域毎の適中率は、関東甲信、東海、北陸、沖縄地方で4から5ポイント低くなりました。明後日予報は関東甲信、東海、北陸、中国地方では6から7ポイント低くなりましたが、北海道地方では5ポイント高くなりました。明日の最高気温の予報誤差は、例年と比べて九州南部地方で0.4大きくなりましたが、北海道、関東甲信、中国、四国地方では0.3から0.4小さく、全国平均では0.1小さい2.0でした。また、最低気温の予報誤差は、例年と比べてほぼ全国的に小さく、特に北陸地方では0.5、近畿地方では0.4小さくなり、全国平均では0.2度小さい1.4でした。

(注) 例年値は気象庁HP(予報精度検証)内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【4月の天気予報から】

寒冷前線が通過した後の天気が回復しつつある段階で雨が降ることがあります。これは上空に冷たい空気が流れ込んで大気の状態が不安定になり、積乱雲が発達するためです。地上付近と上空の気温の差が大きいほど強い雨が広い範囲に降り、時には雷雨となり、ひょうを伴うこともあります。

24日の朝、日本海の低気圧からのびた寒冷前線が東北地方から関東地方北部を通過した後(図1)、同日の昼過ぎから夜遅くにかけて上空に冷たい空気が流れ込みました。23日(前日)の夕方に発表した東京地方の天気予報では24

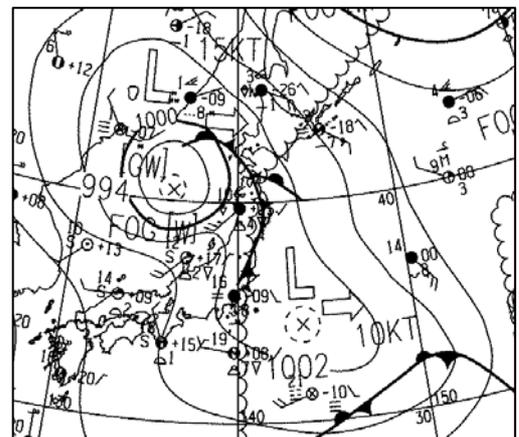


図1 2006年4月24日9時の地上天気図

日の天気を「くもり時々晴れ」と予報しました。これは、寒冷前線の通過後、午後になってから上空の気温がやや下がって雲は発生し易くなるものの、雨は一部で局地的に降るだけと判断したためです。しかし、実際には上空に予想以上の冷たい空気が流入したため、東京地方の広い範囲で宵のうちから夜遅くにかけて、1時間に数ミリの雨が降りました。



図2 2006年4月24日22時のアメダス1時間降水量

上空に冷たい空気が流入して大気の状態が不安定になる場合、関東地方などの広い範囲のどこかで雨が降る可能性が大きいことはほぼ予想できますが、地上付近の気温や湿度・風と上空の気温など大気の状態の微妙な違いによって、雨が降る時間帯と範囲や雨の強さが大きく変化するため、予報が難しい現象の1つです。

【6月の天気予報の利用にあたって】

6月は梅雨前線が本州付近に停滞して曇りや雨の日が多くなります。梅雨前線が停滞して活動が活発になると雨の日が続きしばしば大雨となります。

2001年には、梅雨前線が6月前半は時々本州付近まで北上しましたが長期間停滞することなく、その活動はあまり活発ではありませんでした。6月後半になると本州付近に停滞することが多くなり、活動も活発となったため、西日本各地でがけ崩れや土砂崩れなど大雨による災害が多数発生しました。福岡では19

日に200mmを超える大雨が降りました。その後も月末にかけて連日の雨となり、しばしば雷雨となりました。

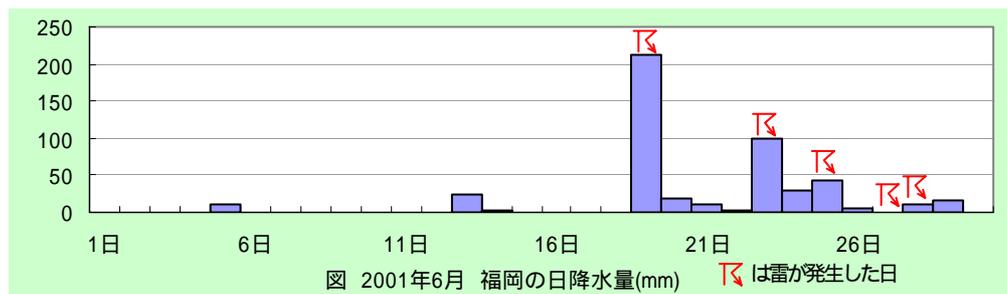


図 2001年6月 福岡の日降水量(mm) ⚡ は雷が発生した日

雨が降り続けると土の中の水分が増えて、がけ崩れや土砂崩れが起こり易くなります。雨の日が続いているときには、特に大雨についての気象情報に注意して、警報・注意報などの防災気象情報を活用して災害に備えることをお勧めします。